

釣れ釣れなるままに

2012年思い出の釣行記 PART. 7

困っちゃうな〜あ〜 鹿島釣狂

ああ 今夜だけ

平日の10月4日（木）に勤務休みをとった。この頃がシャケの寄付きがよいだろうと見込んでのことだ。そうすると天気予報が気になる。シャケを沿岸に近寄せなかった9月の猛暑も朝夕はめっきり涼しくなってきた。台風も二つ三つ通り過ぎて海水を掻き混ぜていった。近海を漂っていた高水温が少しは冷たくなったのだろうか。今年のシャケは全くの不漁だと聞いている。幌川や群別川で少しシャケが釣れ始めた様だ。

その折角の平日休みだというのに、その大事な日に運悪く、娘の子いわゆる初孫が生まれてまだ2週間なのだが、健診があるとかで車にチャイルドシートをセットして、産婦人科医院に送り迎えをせねばならない羽目になった。女房が普段乗り回している古々車パジェロミニでは、増毛へと遠出するにはエンジンが焼けてしまいそうでチト心もとない。

孫と娘と女房を病院に送った後、今朝発行されたばかりの「つりしん北海道」を手にとってみると、なんとシャケ釣りの記事が華やかに踊っている。こうなってくるともう止まらない。どうにも止まらない。メスシャケが「♪ ぼやぼやしてたら 私は誰かの いい子になっちゃうよ。(山本リンダ)」と呼んでいるようで「♪ 逃がさない パッと 狙い撃ち」「♪ ああ 今夜だけ ああ 今夜だけ もう どうにも とまらない♪」。一旦、火が付いてしまった思いは燃えるばかりで、「ああ、今夜だけ」と午後から出かけることにした。幸い、明日は午後勤務なので場合によっては午前8時までの釣りが可能だ。

午後3時、増毛町箸別川の橋の袂に着いた。4台駐めることが出来る空き地に1台分の隙間があったのでそこに駐車する。この時期、この周辺の路肩はいつも満杯で橋の上にも駐車されている状況だが今日は車が無い。よく見ると「はしの駐車を禁ずる（増毛町）」との看板が立てられている。真ん中ならいいのかなと一休さん。まさかねえ。道交法違反になるので警察ではあらためて看板は出していないのだろう。それでも、住民からの苦情が絶えなくて、役場のほうで立てざるを得ないのだと思われる。胴長をはきながら準備している間にも後から来た2台が路上駐車となった。

河口には5人の釣り人がウキルアーを飛ばしていた。波打ち際にはロープで括られた20本ほどのシャケが漂っていたが、仲間3人で朝の9時頃からやっつの釣果だという。海面を見るとシャケの背びれが密集してうごめいていて、ウキルアーが着水すると同時に、その塊が四方に波飛沫を上げて疾走している有様だ。

購入したばかりのスーパーブラーを準備するのももどかしく、昨年使い古したウキルアー仕掛をそのまま飛ばした。1度使用したものだが針先は鑢で研いであるので大丈夫だろう。ルアーの表面は所々色が剥げ落ちているが、これはまあ、よしとしよう。

ルアーが着水して速めに引いてくるとすぐにゴツゴツとしたアタリが出て、竿を煽るとシャケが掛かった。今まで感じたことのない強い引きである。1年ぶりだからそう感じるのだろうか。丁寧に寄せてきたシャケは背びれにハリが掛かっていた。どうりで引きが強いはずだ。少しブナが掛かっているがまあ、よしとしよう。しかし、その後もスレ掛かりが多くて婚姻色が濃く鼻曲がりのためリリースを繰り返す。ゆっくり引いて食わせるようにすると比較的ブナ色の薄いものが口に掛かってきた。河口に寄ってきてからまだ日が浅く、食いつくだけのファイトがあるのだろう。スレ掛かりしないように慎重にルアーを引くのだがそれでもスレ掛かりのほうが多い。

なんだかつまらなくなってきた。薄暗くなった午後6時を告げるサイレンを区切りとして打ち止めとする。確保した比較的ブナ色が薄かったメス2本、オス3本のシャケの頭を切り落としてから、万が一釣れたときの為に用意したクーラーに詰め込んだ。

ウェーダーを脱いでいると、隣に1台の車がやってきた。すぐに準備をし始めて、これから午後9時ごろまで釣りをするらしい。ブナが多かったというと、「これから粋のいい奴が釣れ、ギンピカも稀ではあるが釣れる。スレ掛かりしてしまうルアーは駄目で、フカセでやるとエサに食いつくのだ」という。更に、「帰ってしまうのはもったいないので一緒にやりましょう」と勧められたが、一度萎んでしまった心に火を点すことが出来ない。一旦、車の中でウキフカセ仕掛を作りながら休憩することにした。そうこうしているうちに気持ちが高まり、仮眠をとった早朝にもう一度挑戦することとした。3時に目覚ましをセットして横になっているうちに眠り込んでしまった。



4日の釣果 オス3本 メス2本

嬉しいような 怖いような

午前2時に目が覚めて「ウダダ、ウダダ、ウダウダデ」していると、新しい車もやってきたので、自分も準備して河口に向かった。比較的空いている状態で、隣に挨拶を交わしてからウキフカセで釣り始めることにした。ウキに差し込んだギョギョライトが漆黒の闇夜に放物線を描いて飛んでいく。ウキを潮に乗せているとその光が見えなくなり、竿を静かに立てるとゴツゴツとしたアタリが出た。竿をグイッ、グイッと煽ってハリを食い込ませるとシャケが一気に疾走する。重く鋭角的な引き込みに耐えているとハリを外そうとガクガクと2度3度頭を振ってから横跳びに海面から飛翔した。波打ち際に横たわった魚体は、ほんのりとピンク色に染まった正真正銘のギンピカである。タコベイトを被せた赤のルミコが妖しく光り、金色の16号フカセバリが上顎にガッチリと食い込んでいた。昨夜の御仁が話していたのは本当だったのだ。

気をよくして更に遠くへ飛ばした2投目でもすぐにシャケが掛かったが、波打ち際ではらしてしまった。よく見ると自分で作った仕掛の5号ハリスのチモトが切れている。シャケの歯が当たったのだろうか。今度はフカセ仕掛のハリスのチモト部分に赤のビニルパイプを被せて強化する。結構、ブナ掛かったのも食いついてくる。朝はやはり活性が良いのだろうか。リリースする数も増えてきた。昨日よりも自分が設定するギンピカに対する評価基準が上がってきたのだ。しかし、またもや、チモト部分が切れてしまった。道具箱には古くなった安物の5号ナイロンしか入っていなかったの、それを使ったのがいけなか

ったのだろうか。仕方がないのでウキルアーに替えて再度挑戦する。

川向の釣り人とオマツリしてしまった。潮は左から右へと流れているので、左方向に遠投して右方向へと流しながら引いてくるようにすると皆がオマツリしなくて按配がいいのだが、一人が違う方向に投げってしまうとオマツリが多くなるのだ。私より右側の釣り人のルアーまでごっそりと持って行ってしまふ。私が引っ張ると遠くにあった私のルアーも一緒に絡まってしまふゴチャゴチャになってしまうので、彼が引っ掛けたルアーで私の道糸を引っ張っていってもらって外してもらおうと絡まりが少ないのだが、自分では外したくないらしい。結局私が引っ張る羽目になりゴチャゴチャに絡まった私の道糸や仕掛け糸を切って外すことになる。そのうちにオマツリした仕掛けにシャケが掛かってしまった。そうなるともうてんやわんやだ。PEラインに相手のルアーが絡まったままシャケを引っ張ってくるのだが、その絡まったルアーが竿先にまできてしまふリールを巻くことも出来ない。何とかシャケを外れてくれないかなと思う時に限ってガッチリ食ってしまった。竿を石原に置いて軍手をはき、道糸を持って引っ張り上げた。婚姻色が濃い大きなオスシャケだったが持ち帰ることになった。これまでリリースしてきたシャケは濡れたタオルで覆って丁寧にハリを外してから海に返していたのだが、こいつは暴れて手に負えないので石ころで頭をたたいて失神させてからハリを外したのだ。道糸がその辺の岩に擦れてしまふってボロボロになってしまった。

これから再度シャケを釣る元気はなくなってしまった。そしてシャケ釣りそのものさえなんだかつまらないことの様に思えてきた。これまではシャケの1本を釣るのに「♪嬉しいような 怖いような ドキドキしちゃう 私の胸」だったのに。

午前7時に終了する。この日はメス5本とオス1本を確保した。昨日と合わせると計11本となる。放流したブナが強くかかったシャケを合わせると20本以上は釣っただろうか。昨日の分はクーラーに詰め込んであるので、今日の分は氷と共にバツカンに入れて持ち帰ることになった。このシャケの始末に再び山本リンダ登場「♪困っちゃうな〜あ〜」。

メス2匹だけを我が家用に確保して残りは隣近所に配って歩いた。しかし、婚姻色の強いオスシャケ1本は気が引けて再度持ち帰ることになってしまった。早速、メスシャケを捌いてみるとイクラがハラハラとこぼれる様に出てきた。いつものように日本酒がたっぷり入った醤油付けにして食べたが、これがまた美味くて美味くて、ご飯が進んでメタボ復活かと心配してしまうほどだった。「♪困っちゃうな〜あ〜」。



5日の釣果 メス5本 オス1本 (右端)



ウキフカセで最初に釣れた銀ピカのメスシャケ



あらためてウキフカセ仕掛（右6組）を作ってみた。チモト部分には赤のビニルパイプを長めにしてかぶせた



ハリ部分はケミホタルを折ってタコベイトをしっかり下げると完成

田村式ステンレス製三脚

大雪山連峰から初雪の便りが届き、朝夕はめっきり冷え込むようになった。10月のこの時期の初雪が例年より早いものかどうかは分からないが、紅葉が一気に進み、夏から秋を通り越して冬が来てしまったという感じだ。釣り新聞でもようやくカジカの便りが聞こえるようになってきた。しかし、それは全くの走り、まだまだアカハラで点数を稼いでいるのが実情のようだ。10月21日、岩見沢釣遊会第6回大会が東静内港～浦河港で開催された。

今回は立ち込み用三脚を用意した。いつもはこのステンレス製の三脚が重たいのでアルミ製の三脚しか持って歩かないのだが、本日は最干潮が00:44、23cmと逆潮になっており、現地に着いた時は岩盤の先端に出て竿を振れる状況なのだ。少しでも長い時間竿を振るためには潮が込んで来ても立ち込みを続けていられるこの三脚が便利なのだ。今日持った三脚は故大前氏の遺品である。自分の田村式立ち込み用三脚もあるのだが、風や波の影響で竿が三脚から外れてしまうという欠点を持っていた。

【旧モデル】

竿受け部がV字のため、竿が収まりづらく、強い風が吹くと竿受けから外れてしまった。それで1.2mmステンレス線を竿受け部に自由に取り外しできるように取り付けたり、ゴムパイプを取り付けたりしていたが、竿を外すときに少々手間取った。また、竿尻受け部が狭く、強い負荷がかかると外れてしまった。



竿受け部がV字のため竿が外れる。ステンレス線で補強



竿尻受け部に強い負荷がかかると外れてしまう

【新モデル】

旧型は重くて持ち運びに苦労したので、何とか軽くすることは出来ないかと仲間が工夫を施して鉄工所に依頼して作り上げたのだが、重量についてはあまり成果が上がらなかった。しかし、竿受け部をV字からU字にしたり、竿尻受けを円柱にしたりで、竿の収まりがよくなった。また、写真では分かりにくいですが、竿受けの横軸の中にバネ式ワイヤーを通して、それを伸ばしたり縮めたりして固定したり、折り畳んだり出来るようになっていたのだが、そのワイヤーが長年使っていると切れてしまうという欠点を持っていた。仲間は切れたワイヤーを取り替えて使っている。これはボルトで固定したり外したり出来るようにしたものだが、その作業に時間を浪費してしまうのが欠点だ。



竿受け部がV字からU字に改良された



竿尻部は円柱になった



ワイヤーからボルトで固定された竿受け部

吹きすさぶ嵐の中で

午後11時前には早々と東静内港で着替えを済ませ、予定通りトップで春立港に下り立った。これから漁港内で1時間ほどアカハラを狙い、それから春立4区に向かっても最干潮時には間に合う算段だ。早速、コマセを撒いてアカハラを誘い、おもむろに天秤仕掛けにゴロをつけて打ち込みを始めた。新月だが漁港内に設置された照明で海面が妖しく光り、大物が潜んでいるように思えた。しかし、アタリは全く出ない。移動しようかと思いがぐねているとアカハラを思わせるチョコチョコとしたアタリが出て、そのアタリに合わせると20cmに満たないソイだった。がっくりコンと項垂れる。似たようなものが3匹出たが、アカハラは見込めないようなので春立4区に向かうことにした。後で嵐氏に尋ねると、この時期、ここらでアカハラが出るのは東静内漁港ぐらいで、それも粘って何本かというものだそうである。9月はあれだけ釣れたのに、どういうわけだか10月になるとピタッといなくなってしまうのだ。

岩盤の先の先まで出られると思っていた春立4区だが、思ったより潮が混んでいた。岩盤先で立ち込み用三脚を立てるような状況ではなく、舟揚場まで下がって竿を立て掛けた。そして岩盤の切れている30m先まで、膝位の潮を漕いでゴロ天秤ネット仕掛けを打ち込んだ。チビカジカが出た。ハゴトコが出た。30cm強のカジカきて、これから満潮に向かっていよいよ潮が動き出したかなと思っていると、暗雲が立ち込めてオリオンを覆い隠し、黒雲と水平線の隙間に稲妻が走って、まもなく突風が吹き出した。三脚を低くして竿先だけに乗せてから、自分はテトラの際に身を寄せて雨風を凌いだ。雷が徐々に近付いてきて竿が三脚ごと倒された。その時は頭上からも雷光と大雨が降り注ぎ、今にもカーボン竿に雷が落ちてきそうで、恐ろしくて近づけない有様だ。しかし、自分の命より竿の方がいた

ましく思ったのか、おっかなびっくりで竿は何とか引き上げた。それから、自分はコンクリで囲われた舟揚場の横壁に身を低くして避難し、突風が過ぎ去るのをひたすら待った。レインウェアを新調したので、撥水性がよく、雨が染み込むようなことも汗で蒸れるようなことも無かった。このウェアはウェーディングジャケットというハイカラなネーミングで、ブレスシェード加工とかなんとかを施してあるとかいう優れもので、シャケ祭りの大売出しで、定価の1/3の値段で大安売りしていたのを購入したのだ。今までの古ぼけた雨合羽では、体がビショビショになっていたことだろう。

何とか雷の轟きも遠くなり強い雨風は治まったが、気持ちのほうは折れてしまった。波の方はゴウゴウと打ち寄せてきて岩盤の先で波飛沫を高く打ち上げている。ここは場所を変えて気分一新で臨まなくてはならないだろう。春立交番裏の方へと足を延ばしてみると、釣り人がおり、お互いに突風や雷の恐怖で引きつった顔をしながらも釣果を交流した。彼は、私より大きいカジカを3本上げていたので、すぐに引き返して荷物を取りに戻った。

その御仁の隣の舟揚場で竿を設置したのだが、まもなく舟揚場の上のほうまで波が上がってくるようになり、時折打ち寄せる大きなウネリで体ごと流されては大変だと、防潮堤に上がって釣りを再開した。そこで、ようやく35cm強のカジカが釣れた。



最後の移動先の春立交番裏で竿を出す。舟揚場に打ちあがった波が満杯になって上のほうまで押し寄せてきた

そのうちに仲間からの携帯電話が鳴りっぱなしになって、釣りどころではなくなった。

電話の内容は、「この暴風雨と高波で釣りをやめてしまった。帰りのバスの時間を繰上げてきないだろうか」というものだ。仲間内には連絡が取れるし、バスが待機している浦河港にも仲間がいるので何とかなるが、お客さんを乗せているので難しいことを伝える。しかも、誰か一人でも締め切り時間まで釣り続けたい者がいれば、その仲間を大事にすべきだろう。

それでもあちこちから電話が来る。井寒台に下りたお客さんの一人に確かめるが、近くにいる者には連絡がつくが井寒台の全員には伝えきれないという。私はその話を有耶無耶にして釣り続けることにしたが、その後はアタリさえ出なかった。しかし、有耶無耶にしてしまったこともあり、打ち込みだけは丁寧に続けた。再度、電話が鳴った。浦河港の仲間からだった。「運転手に理解を得たので早く出発するぞ。釣り場に下ろしたところでは丁寧に参加者を集めながら来るので心配するな」というものだ。そういうことならと納得する。私は最後まで釣りを続けることを信条にしているが、こんなに釣れないので釣りそのものまでやめたい気持ちになっていたのだが、片付ける切欠ができたというものだ。そういうことなら仕方が無いと一寸とホッとした気持ちになった。浦河港を早々と出発したバスは、皆も早々と道路上に上がって待っていたらしく、すぐにやってきた。

審査結果

審査結果

優勝	前野達志	1168点	(カジカ 410mm+アカハラ305mm+4530g)	浜荻伏
準優勝	谷口良幸	1009点	(カジカ 386mm+アカハラ327mm+2960g)	浜荻伏
3位	嵐光博	1002点	(カジカ 416mm+アブラコ310mm+2760g)	三石右
4位	小野田正男	872点	(カジカ 381mm+アブラコ241mm+2500g)	井寒台
5位	仲俣廣昭	848点	(カジカ 362mm+アブラコ270mm+2160g)	春立
身長優勝	川原要四郎	1021点	(カジカ 431mm+アカハラ330mm+2600g)	井寒台

私が最後にバスに乗り込むと、嵐の中での釣りだったため皆疲れ切った顔で釣果のほうもぱっとしない様子であった。しかし、審査ではカジカがゴロゴロと出てきた。あの強い雨風と高波の中でよく釣ってきたものだと感心する。

優勝の前野氏は、西風では波が死ぬという浜荻伏でダントツの成績を収めた。それも、砂嵐に会い竿は飛ばされて三脚ごと倒れてしまうし、ゴロとコマセは無事だったもののカツオが入ったバツカンが飛ばされて波間に消えてしまった。その後は釣りを止めざるを得なかったという。年間優勝の掛かった釣りだったが、長い時間、歯軋りをしながらバスが来るのを待っていたのだろう。それでも優勝とはさすがである。身長優勝の川原氏は、これも波が死ぬ井寒台でカジカの大物を上げてきた。点数でも2位に相当する釣果で、カジカキラーぶりを見せつけた。準優勝は、谷口氏であった。彼は前野氏と一緒に浜荻伏に下り立ったのだが、やはり早いうちにカジカとアカハラを釣り、準優勝を果たした。「早くやめて宴会するぞ」という前野氏の誘いをさり気無く断り、釣りモノがなくても粘りの釣り

を展開していたのだろう。3位は嵐氏である。三石の右を流してハゴトコも10匹以上は釣ったというから最後の最後まで粘った成果だと思う。

前野会長から差し入れられたお米は、会長が優勝した為、優勝者に提供されるはずだったのを辞退されて身長賞と準優勝者に提供された。谷口氏はこれまでお米が賞品のときは必ず獲得してしまう運の強さを発揮している。



入賞者の顔ぶれ 後列左から 4位：筆者、5位：大内
前列左から 準優勝：谷口、優勝：前野、3位：嵐

【誤審】

日高門別の「いずみ食堂」で審査をした後、蕎麦をいただいた。人気の「いずみ食堂」には、早々と電話で予約を入れており、当日も静内川で、そして厚賀川でも、到着時刻を予測して電話を入れておいた。早めに釣りから上がったのが幸いしたのか「岩見沢釣遊会様」と予約席が確保されており、待たされること無く注文の品が出てきた。しかし、我々が入ったすぐその後には長い行列が出来ていた。手稲支部「海猿」のメンバーの顔も見えたが、それぞれがその行列の中に加わっていた。「いずみ食堂」の蕎麦は噂に違わず絶品で、私たちの喉を唸らせた。

ここで、お断りしておく。「いずみ食堂」での表彰時に私が4位の賞をいただいたのだが、それは誤審で小野田氏が4位だったことが判明した。小野田氏の得点が872点のところを827点と成績表に記入してしまっていたのだ。ここで改めてお詫びを申し上げておく。

帰宅後、間違いに気が付いて小野田氏に電話を入れたところ、気にするなと全く取り合わない。それでもって賞品もちっかりと自分のものとしたのだ。また再び山本リンダ登場「♪困っちゃうな～あ～」。